

長尾宗典著

『〈憧憬〉の明治精神史』

——高山樗牛・姉崎嘲風の時代——

(二〇一六年・ペリかん社)

尾原 宏之

ある思想家に密着し、徹底的に全容を解明しようとするタイプの研究は、今日なかなか困難である。荻生徂徠や福澤諭吉のような著名思想家についての研究業績は汗牛充棟のようであり、新しい視点は簡単に見つかりそうにない。だからといって手垢のついていない人物を選べば、やはり研究されてこなかっただけのことはあるという寂しい結論に終わりがちである。昨今の近現代日本思想に関する議論は、さながら新機軸の打ち出し競争のようにも見え、昔ながらの研究が恋しくなる時もある。

本書は、高山樗牛と姉崎嘲風という分厚い研究蓄積のある思想家に正面から挑み、着実な方法で新たな視圈を切り開いた力作である。著者の長尾宗典は日本近代思想史・メディア史・図書館史の研究者で、本書は二〇一五年に筑波大学より博士(文学)を授与された学位論文がもとになっている。まず、本書の概要を紙幅の許す限り確認しておきたい。

序章では、本書の問題意識・課題・方法が語られる。明治二

〇年代後半は、憲法制定や議会開設など近代国家の「ハード面」の整備が一段落した時代であった。代わって登場したのが、言語・宗教・伝統・美術など「ソフト面」での精神的価値の確立という課題である。樗牛と嘲風の活動は、日清・日露戦争期に「文学美術あるいは宗教の次元で」「国民」の内実を探索した文化的なナショナリズムの一つの型」であり、その思想は大正の「文化主義」や昭和の日本浪漫派につながっている。

本書の課題は、樗牛と嘲風の思考様式と、時代状況に対する主張との対応関係を描き出すことにある。その思考様式が、樗牛と嘲風が二人で編み出した造語〈憧憬〉にはかならない。〈憧憬〉とは「設定された理想に美を見出し、現実処していく方法を模索しようとする精神」であり、直接的に理想状態を目指すのではなく、あくまで理想を〈憧憬〉し、現実を生きる自己の精神生活を豊かにし、人格を修養する点に特徴がある。

第一章「明治期における『美術』の語り方」と「美学」の誕生」では、樗牛と嘲風の登場を用意した、明治初期からの「美術」概念の変容、「美学」という方法の定着、「批評」というジャンルの成立、そして読者層の基盤となる「誌友交際」が論じられる。「誌友交際」とは、明治二〇年代に登場した、印刷物の寄贈交換や匿名による相互の論説批判などを媒介とする、書き手と読み手が混然とした非対面的コミュニケーションのことである。この時期、各地で校友会雑誌や同人雑誌が創刊され、中央の文芸雑誌は読者の投稿や投書をさかんに取り上げた。表

現欲求を刺激された青少年同士の「誌友交際」は、文章の練磨と相互批評による内面の充足をもたらし、「文学青年」を生む母体となった。樗牛と嘲風は、この世界から出発した最初の世代の人物である。

第二章「高山樗牛・姉崎嘲風におけるドイツ哲学の受容」では、高等中学校、帝国大学における樗牛と嘲風の思想形成が検討される。長尾は、二人が帝国大学文科大学で受講した井上哲次郎とケーベルの講義を詳細に分析し、これらの講義を中心としたドイツ哲学の受容が、樗牛の「美学」と嘲風の「宗教学」そして言論活動の基礎となったことを明らかにした。

本書の課題に即して重要なのは、「憧憬」という思考様式もまた、井上やケーベルの講義を通して「発見」されたことである。樗牛は井上の講義で学んだ「現象即実在」論や「経験的に把握されうる現実のなかに、実在たる理想の一端を見出し、理想の実現に向けて邁進していく」とするきわめて漸進主義的な立場」によって、「憧憬」という「新しい思考様式」を発見した。嘲風は、ケーベル講義を契機に学んだシェリングによって、絶対者を把握する根源的な力として「憧憬」を位置づけた。

第三章「日清戦後における〈憧憬〉の萌芽」は、明治二九年に大学を卒業した樗牛と嘲風の言論活動についての考察である。博文館に入り、雑誌『太陽』に場所を得た樗牛は、同時期に勃興した思想運動「日本主義」にコミットした。樗牛の「日本主義」の特色は、論者によって違う「日本主義」という概念の理

論化を目指したこと、「日本主義」の立場から文学や美術を批評したことである。樗牛の「日本主義」は、「民衆最大の幸福」を保障する「国家」の完全な発達のために「国民的特性」に基づいた道德の確立を目指す思想で、批評でも道德は文学や美術より優位に置かれた。ところが樗牛は、徐々に「日本主義」から離れていく。批評で「日本主義」を押し出せば押し出すほど、歴史的にも同時代的にも美術や文学を解釈できないことが明らかになり、基礎理論の見直しを迫られたからである。研究上の主著『近世美学』で美的価値の自律性を認めるに至ったこと、道德の限界を指摘して「美」を感受する「感情」に注目するようになったことは、その帰結である。一方、嘲風は大学院に進学して研究を続け、『宗教学概論』に代表される近代日本宗教学の構築や、宗教関係者の連絡組織、宗教家懇談会の活動などに打ち込んでいく。日本人の国民性を「現世的」だとし、国民道德から宗教を退けた樗牛と違い、嘲風は日本人の国民性に異なる教義体系の宗教を受け入れる「包括融合」を見ていた。

第四章「世紀転換期における〈憧憬〉の精神」は、明治三三―三四年ごろに起こった樗牛の思想の変容を丹念に追った章である。日清戦後の条約改正によって、日本が「文明国」の仲間入りを果たしたという意識が国内に生まれると同時に、北清事変における露仏両国兵の残虐行為、足尾鉾毒事件や労働問題の発生など、「文明」の負の側面も認識されるようになった。このような状況下で、樗牛の論説にも変化があらわれる。「日

本主義」を掲げて宗教を否定していたはずが、科学や哲学では「理窟」を教えられても「価値」を与えることはできないとして、「理外の信仰」宗教の意義を認めるようになった。

この時期の樗牛の思想で重要なのが、「文明批評」の試みと「美的生活」論である。「文明批評」とは「人々の生を取り巻く社会状況への批判」であり、偉大な「文明批評家」としてニーチェが示される。樗牛が目指したのは、ニーチェやイブセンのように時代の精神を作り出す「主観主義」「個人主義」に立脚した「文明批評」であった。明治三四年ごろ、樗牛は武士道の強調などの道德的言説が猖獗をさわめる言論状況に不満を抱き、「文明批評家」としての文学者が創出すべき価値を模索するようになる。その答えが、大きな反響を呼んだ論説「美的生活を論ず」である。人生の目的を「幸福」「本能の満足」と定める樗牛は、「本能」を満足させる実践として「美的生活」を唱え、その価値を絶対的なものとした。樗牛の「美的生活」論は、原理論としての「美学」と時代認識としての「文明批判」の精神が結合して生まれた「日本主義」に代わる新しい主義の提示であった。

また長尾は、埼玉の忍町で県立中学の卒業生と在校生によって刊行された『鴛鴦文学』の詳細な検討を通して、地方青年の同人に「文明」への懷疑と文学熱が伝播していたこと、そしてそのなかで樗牛の言論が「文明」に対峙する「文学者」の仕事として共感を得ていたことを明らかにした。

第五章「日露戦争期における〈憧憬〉のゆくえ」では、明治五年に病没する樗牛最晩年の思想と、日露戦争前後の嘲風の思想が論じられる。樗牛は田中智字の影響で日蓮に傾倒し、その研究に打ち込んだ。樗牛にとつての日蓮とは、苦難に耐えてみずからの信仰を貫き通した「美的生活」の体現者であり、〈憧憬〉の対象としての「天才」である。「偉大な人格を〈憧憬〉することによって、絶えず理想の世界を設定し、現実を批判しつつ、国家をも相対化して、精神的文明の内実を豊かにしていく道」を探った樗牛の思想活動の到達点であった。

一方、明治三三年から洋行していた嘲風は、日本にいる最晩年の樗牛と書簡をやりとりし、それらを『太陽』に掲載していた。嘲風は現今日本の道德や學術に対して「反抗的革新的精神」で臨む使命と、自己の「ロマンチックの傾向」を有する「個人主義」「主観主義」について語っている。樗牛の没後、明治三六年に帰国した嘲風は、日露戦争前後にあらわれる、人生の懷疑に陥った「煩悶青年」を擁護する論説を発表する。

嘲風の思想に変化があらわれるのは、『時代思潮』時代である。第二次旅順攻撃のころから、国家に対する個人の自己犠牲の価値を強調し始める。宗教論においても、主観的な「小我」から客観的な「大我」へと重点を移し、「愛の団結に服従する我」の意義が説かれる。国家に接近していくように見える嘲風だが、普遍的な理想と特殊の現実を絶えず往復する〈憧憬〉によって、素朴な国家主義に陥らず、あくまで人類の精神的発展

に寄与する態度は貫いた。しかし、支持基盤であった青少年の「誌友交際」の世界に浸透する「自然主義」を覆すだけの新しい「理想」を生み出すことができず、青少年たちは嘲風から離れていく。終章では、その後国家にいつそう接近していく嘲風と、当局の取締強化によって地方の同人雑誌を中心とする「誌友交際」の世界が閉塞していく様子が描かれる。

本書の最大の特徴は、その厳格な史料の取扱と分析にあると思われる。初出誌の記事を博搜し、書簡などの未公刊史料を発掘するだけでなく、従来活用されてこなかった講義録などの図書資料、地方の同人誌ならびにその関係者の日記まで網羅的に収集し、しかもそれぞれに史料批判を行っている。特に、ケール講義の史料批判と分析、「日本美術史未定稿」構成の検証、樗牛のニーチェ受容の再検討、「美的生活」論に対するサンタヤーナの影響の測定、「誌友交際」の実証的研究などは、本書の核心部である。樗牛は「思想的振幅の大きい、一貫性のない思想家」として描かれがちであり、また実態がよくわからないままその影響の大きさが自明視される傾向にあった。本書は、本人ならびに周辺の史料を徹底的に掘り起こし、新しい視圈を切り開いた上でその実情を明らかにしている。全集のみに依拠した近現代思想史研究を厳しく批判する長尾の提言は、耳の痛い話として受け入れるべきであろう。また史料の発掘と読解にとどまらず、その基礎の上にはじめて可能になる思想に内在し

た考察も、本書の魅力のひとつである。たとえば「日本主義」から「美的生活」論に至る過程の分析では、「日本主義」的な批評の論理が内破していく様子を説得的に描いており、本書にダイナミズムをもたらしている。

おそらく最大の問題となるのは、タイトルにもある「憧憬」という言葉であろう。終章において長尾は「〈憧憬〉」という思考様式」の特徴の第一を「思想活動の中心となる理想と現実をめぐる解釈において、現実を顧みずに理想を振りかざすのではなく、また理想を排して現実拘泥することなく、両者の中間にあつて、理想の実現の不可能性を認めながら、理想の実現に向けて現実を漸進的に発展させていく」とする態度」と定義する。本書の「憧憬」についての議論をまず印象レベルで総括するならば、樗牛と嘲風の伝記的事実について、「日本主義」について、「美的生活」論について、また「誌友交際」について積み重ねられた研究の密度が濃ければ濃いほど、「憧憬」の概念の曖昧さが目立つように感じられた。長尾は、論を運ぶ過程の随所で樗牛と嘲風の言説を「憧憬」の観点から位置づけなおしているが、腑に落ちる部分がほとんどはいえ、やや牽強附会気味に感じられる箇所もあった。本書を通して「憧憬」それ自体の概念史を追うことは簡単ではない。「憧憬」という新しい思考様式」「憧憬」する立場」「憧憬」の発想」「憧憬」の思惟」「憧憬」の態度」と幅のあるニュアンスで表現されて

いるが、嘲風がいうように〈憧憬〉が「この時代の心持ち」つまり心情や態度であるとすれば、洗練されることはあっても「方法」として発展していくとは考えにくいからである。

樗牛と嘲風の〈憧憬〉が当人の思想を規定し、青少年に影響を与えたことは事実であろう。長尾は「芸術・宗教への〈憧憬〉と「我」の自覚、これが高山・姉崎の思想活動が青年層に与えた最大のものであった」と総括した。教養主義、文化主義など大正期の思想につながる要素であり、今日の芸術受容に受け継がれている側面もあるように思われる。「偉人や天才の業績」への着目という〈憧憬〉の第二の特徴、「実践よりも観照を重視する立場」と、「天才」の「精神」を呼吸することの重視という第三の特徴を想起した時、説得力がある。

だが、〈憧憬〉が「新しい思考様式」かどうかについては一考の余地がありそうである。「理想」を「理想」として仰ぎつつ、かつ「現実」にのみ拘泥することなく、物事を漸進的に発展させる態度が〈憧憬〉の第一の特徴であるとすれば、明治期に限ってみてもそれに該当する著作は多いように思われる。たとえば、長尾も触れている樗牛たちよりはるかに年長の福澤諭吉が『時事小言』の冒頭で「天然の自由民権論は正道にして人為の国権論は権道なり」といった時、そこには理想の世界と立ち向かうべき現実の国際社会の両極がイメージされていないかっただろうか。また樗牛が失敗した第一高等中学校の入試に合格し、のちにドロップアウトした社会主義者堺利彦は、日露戦争

と前後して理想社会の人間像を構想しつつも、現実にはどちらかというときマチャミした活動に取り組んでいた。同時代の「理想」と「現実」をめぐる思想と比較した場合に〈憧憬〉はどのような地位を主張できるのか。その点についてさらなる検討が必要だと思われる。また、これはないものねだりになるが、日露戦争後の嘲風の思想についての分析が樗牛のものに比して密度が落ちるように感じられた。長尾は嘲風の戦争論や満韓経営論について「姉崎の内面においては、勝利への希望は表面的なものであり、戦争以上に日本人の精神的基礎を確立することがより重視されていたと思われる」と評価し、その領土拡張論批判、「富国強兵」批判を紹介しているが、これはやや「理想」に寄りすぎた評価のように見える。終章の最後に予告されている大正期以後の嘲風についての検証が終わり、思想の全体像を見渡すなかでどう評価されるか、待つことにしたい。

本書は、思想史研究が厳しい状況に置かれているなかで、緻密な史料の収集と読解による研究の積み重ねによって大きな「精神史」の流れを描こうとした力作である。本書を読む近現代思想史の研究者は、みずからの研究に役立つインスピレーションを、随所から受けるだろうと思う。

(甲南大学准教授)